

**令和 3 年度 尚綱中学・高等学校
学校評価**

（評価対象年度：令和 3 年度）

学校教育目標

1	知と徳を兼ね備え、社会に貢献できる自立心豊かな近代女性の育成を目指す学校
2	尚絅で学んで良かったと生徒・卒業生・保護者が真に思う学校
3	地域で存在感のある学校

重点目標

1	特色ある教育の確立
2	教育の質向上
3	生徒支援の確立
4	地域貢献の充実
5	学習意欲あふれる生徒の確保

自己評価総括のランクは、**A B C**の3段階とし、次頁以降の「自己評価」で2/3以上A評価となった重点項目を「**A**」ランク、2/3以上AまたはB評価を「**B**」ランク、それ以外を「**C**」ランクとしている。

重点目標に対する自己評価総括

1	特色ある教育の確立	A	今年度もコロナウイルス感染症拡大防止の観点から多くの学校行事を変更・中止せざるを得なかったが、昨年度の経験を基に、オンラインを利用したり、時間短縮をしたり、工夫をしながら実施できた。また体育祭や文化発表会においては今年度は保護者の参加ができなかったため、育友会のご協力を頂きDVDを作成し保護者に配布するなど共有できる部分が少し増えた。
2	教育の質向上	B	教育の質を上げることは、魅力ある授業に繋がり、学校行事、部活動、生徒会活動などを通して総合的な人間力をつけることが進路決定においても重要である。特に、次年度入学生から実施される観点別評価は、授業改善が前提であることを踏まえ、教務部を中心として各教科において検討がなされた。また、業者による「授業アンケート」や「教員能力測定テスト」を実施し、客観的な資料を基に、今後、教員一人ひとりの専門教科能力の向上を目指して、いかに生徒に質の高い教育を提供できるかを常に意識していく必要があると考えている。
3	生徒支援の確立	A	様々な制約の中で学校生活全般を振り返り、いかに活気を取り戻すことができるかを考えながら取り組んだ。また、コロナ感染症による生徒の精神的な支援をはじめ、登校できない生徒の学習支援にもZoom配信を工夫しながら行うことができた。中止になったボランティア活動も多かったが、フードバンクの寄付や子ども食堂の手伝いなどを通して学ぶ場を広げることができた。
4	地域貢献の充実	A	コロナウイルス感染症が続く中、中止になったボランティア活動も多かったが、フードバンクの寄付や子ども食堂の手伝い、産業道路沿いの植栽などできることを手探りで実施した。その活動を通して生徒の学ぶ場を広げることができた。また、部活動においてはできる時期は感染対策を講じながら可能な限り合同練習を行ったり、塾への模試会場の提供などを行った。
5	学習意欲あふれる生徒の確保	B	入学者数の減少がすべてを表しているように広報活動の徹底が全職員でなされていないこと、数の必要性を職員が自分事として捉え、それを行動に移すことができていなかったことが今年度の一番大きな原因と考えている。また、特技特待生の勧誘については、できない事柄を並べるのではなく、プラス要因をいかにアピールするか勧誘の仕方を考えながら次年度に向けてPDCAを基に取り組んでいく必要がある。

自己評価

令和3年度 尚絅中学高等学校 学校評価

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
特色ある教育の確立	人間教育プログラムの充実	外部人材・事業の活用	外部の専門家の活用により授業以外の専門的知識を深める。	A	コロナ感染の状況に応じて、対面・オンラインで工夫しながら講話、研修等を実施した。
		グローバル教育の充実	留学生との交流や外部団体との連携により国際感覚を養う。	A	留学生の受け入れは実施に至らなかったが、オンライン留学の積極的な参加を促した。
		礼法教育の確立	学校の諸活動を通して学んだ礼儀作法を日常生活に役立てる。	B	高校1年次より段階的にマナー検定を受検し、2年次で上級に全員合格を成し遂げた。
		諸活動のPDCAサイクルの確立	教育の柱となる各部の活動を集約し、計画を策定する。	B	感染予防を講じながら年間計画に則り実施した。
	魅力ある授業の確立	教科指導力の向上	教科指導力向上の為、研修会参加や外部講師の助言を仰ぐ。	B	I C Tを中心としたオンライン研修等を行い、情報共有を図りながら本校での取り組みについて検討したが、指導力向上には至っていない。
		授業改善の確立	生徒へ魅力ある授業を提供するために研究授業等の充実を図る。	B	校内での研究授業や授業見学を実施し自己研鑽に役立てた。
		I C T教育の充実	I C Tの利活用により生徒に様々な情報を提供する。	A	連絡や課題の配信及び個別添削等にClassi、登校できない生徒への授業配信や校内での集会等でZoomを活用した。
	進路指導の充実	進路指導力の向上	進路指導部を中心に入試改革の研究を行い、指導力向上を目指す。	B	外部研修会資料を各部・学年で共有し、入試改革についての情報共有・研究に努めた。
		進路研修会の充実	外部研修会参加、A L、新入試制度の対策を行う。	A	オンラインでの研修会に各教職員が参加し、指導力向上や情報収集に努めると共に、情報共有を図った。
		進路実績の向上	各入試選抜に応じた受験指導を強化する。	B	模試の結果分析を進路指導部・学年を中心に行い、面談等で有効活用した。
		課外授業の確立	各コースの進路希望に応じた内容の充実に努める。	A	習熟度別の課外や進路別特別時間割を組んで実施した。
		個別指導の強化	各種検定試験合格、入試志望先に応じた小論文指導や個人指導を実施する。	A	検定試験対策や小論文指導、その他入試対策などの個別指導を実施した。
		進路指導体制の研究と実践	講演会や進路指導情報誌の発行、また、多くの情報を提供する。	A	コロナウイルス感染拡大により研修会が減少したが、可能な範囲で情報提供を行った。
		各コースの教育内容の研究と実践	コースの特色を活かし、より効果の高い編成を検討する。	B	コース別に取り組んだが、多様化される入試に向けて今後も検討を重ねていく。
		特色あるカリキュラム・選抜クラスの充実	最新の情報収集を行い、カリキュラム委員会で検討、策定する。	B	カリキュラム検討委員会や教科主任会で検討を重ね、新年度より新しい時間制、時間割を実施する。
	各コースの特色づくり	各種検定試験の充実	各種検定試験を推進し、取得資格を活かした進路実現を奨励する。	A	各教科や委員会を中心に計画的に実施し、成果が見られた。
		内部進学の実現	内部進学の特長やより多くの情報を提供する。	A	進路指導部を中心にして内部進学の特長等の情報提供を生徒・保護者へ行った。
		高大進学連絡会の充実	高大相互の情報を共有し、内部進学者の進路達成の一助とする。	B	各学科の担当者との打ち合わせ会で双方の情報の共有を行い、「大学教員の研究室訪問デー」等のイベントを実施した。
		中高大連携事業・授業の確立	総合学園としての特色を活かし生徒の進路志望の実現を図る。	A	大学授業体験を計画的に行なった。
		広報活動の連携強化	中高だけでなく大学との連携による一貫教育の良さを強化する。	B	中高入試アドバイザーを中心に、大学入試センターとの情報交換を通して、広報活動に活かした。
教育の質向上	主体的・対話的で深い学びの授業の確立	教育の特長を活かした取り組みの研究と実践	教科会の充実を図り、A L、Classi等を利用した取り組みを実践する。	B	オンライン等での研修会参加や授業見学を行い、教科会で検討した。
		言語能力の確実な育成	プレゼンやディベート等を通して言語能力の育成をする。	A	探究授業や放課後を利用し、プレゼンテーション指導を行い、入試に役立てた。
		教科の横断的な学習の充実	他教科とのコラボを図りながらより広い知識を習得する。	B	全職員による授業研究を行い、指導力向上に役立てた。
	カリキュラム・マネジメントの研究と取り組み	社会に開かれた教育課程の研究	新学習指導要領に則り、地域をフィールドとした研究を推進する。	C	計画していた大学コンソーシアム、熊大ワクワク講義は、新型コロナの影響で実施されなかった。
		理数教育の充実	論理的に問題解決を図る能力を育成する。	B	県の研修会にオンラインで参加して検討をしたが、次年度も継続する。
		伝統や文化に関する教育の充実	伝統文化の知識・技術及び考え方を学び必要な資質の育成を行う。	A	授業を通して必要な知識・技術等を学んだ。
		キャリア教育の充実	学校と社会の接続を考え、身につける能力・資質を育成する。	B	活用する教材の見直しも含めて、取り組みの再検討を行う。

自己評価

令和3年度 尚絅中学高等学校 学校評価

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
生徒支援の確立	奨学生制度・表彰制度等の活用	制度を活用した生徒の支援	学力・特技に秀でた生徒を選考し支援する。	A	計画に則って、選考・採用が決定した。
	課外活動の充実	生徒会活動の充実	生徒会執行部を中心に学校行事等の企画・運営を推進する。	A	生徒会の意向に沿いながら、体育祭は縮小にて実施、文化的行事は、代替として文化発表会を実施し、DVDを全家庭に配布した。
		部活動の充実	部活動を通し、心身の調和がとれた人間教育の一環を目指す。	A	様々な大会が中止になる中、運動部・文化部共に優秀な成績を収めた。
		ボランティア活動の強化	活動を通して奉仕の精神を育成し、地域貢献に資する。	A	中止となったボランティアも多かったが、フードバンク寄付をはじめ、子ども食堂の手伝い等、可能な限り参加した。
		リーダー養成の活性化	研修を重ねながら、リーダーとしての自覚を促し養成を図る。	B	リーダー研修会は実施出来なかったが、生徒会を中心に定期的な委員会や部活動で主体的に取り組み、校内外の活動の充実に努めた。
	教育相談の充実	生徒支援体制の確立	生徒理解を深めるため、情報共有を充実させる。	A	環境保健部を中心に全職員対象の生徒情報共有を行い、職員間の連携を深めた。
		カウンセリングの充実	スクールカウンセラーを中心に問題の早期解決を図る。	A	全校で2・3者面談を実施し、各担当者を中心に連絡を密にして早期対応に努めた。
		外部組織・人的支援の活用	県の支援事業等を活用しながら問題解決に当たる。	A	今年度は特別支援相談員やSSWを活用した支援を行ったが、県の支援が終了するため、次年度は本校カウンセラーを中心に実施する。
	育友会・後援会・同窓会との連携の確立	学校行事での連携強化	学校との連携を図り、学校行事の一層の充実に努める。	B	文化発表会・体育祭は無観客にて実施し、DVDを各家庭に配布した。金峰山登山は、コロナウイルス感染拡大の為に中止した。
		保護者会の充実	学校と保護者の協働による教育体制を充実させる。	B	保護者の密を避けるため、育友会総会・保護者会は、学年毎にZoom等を活用するなど、工夫しながら実施した。
		同窓会・後援会総会等への出席の確立	学校と連携を推進し、協働体制を確立する。	—	総会及び各地区の同窓会、懇親会が中止となったが、今後も連携しながら会員の掘り起こしに努める。
地域貢献の充実	地域活動の支援	部活動等の合同練習会開催の確立	他校や他団体との繋がりを持ち、生徒の活動の場を広げる。	B	感染予防の為に、状況を見ながら合同練習会を一部再開した。
		ボランティア活動の充実	地域に密着した活動を通して貢献する姿勢を養う。	A	九品寺校地周辺の清掃活動や産業道路沿いの花壇への植栽を実施した。
	学校主催事業の充実	本校主催の各種大会の開催	部活動の活性化と各種大会を通して広報活動の一助とする。	A	感染対策を講じながら、可能な限り合同練習や他団体への会場の提供を行った。
学習意欲あふれる生徒の確保	広報活動の充実	活動内容の再検討	より効果的な活動計画を策定し実施する。	B	学校説明を中心としたオープンスクールに変更し、中止された第2回については、追加説明会として実施した。
		広報部員のスキルアップ	外部講師による研修を行い、実践に役立てる。	C	感染症拡大の為に実施出来なかったが、今後も継続的に実施していく。また、施策に代わる取り組みができなかった。
		ホームページの充実	迅速に内容をアップし広報活動の一助とする。	B	部活動や学校行事のアップを迅速に行った。
		全職員対象研修会の確立	マナーなどの指導を徹底し職員の広報力の向上を目指す。	B	入試アドバイザーと連携しながら学校訪問や説明方法を全職員に徹底し、訪問活動を実施した。
		広報部の組織改革の可視化	計画の構築、実践攻略等を中心に全職員の動きを可視化する。	B	学校全体の行事計画に則り、計画的に取り組んだ。
		入試内容の検討	受験生獲得のため問題内容の検討を充実させる。	A	公立高校入試問題の腕試しとしての受験ができるように各教科で工夫し、定着しつつある。
		小学校・中学校・学習塾・個別訪問活動の充実	広報の活動区域を広げ積極的に訪問活動を行う。	B	感染状況に応じた訪問活動を再構築し、入試アドバイザーとの連携を取りながら訪問活動を重ねる。
	入試制度の改革と訪問の強化	制度の周知徹底	入試アドバイザーと共に、小中学校、塾で丁寧な説明を行う。	B	小学生対象に様々な広報活動を行ったが生徒獲得には至らず、改善が早急に必要である。
		特待生制度を活用した学力・特技に優れた生徒獲得の確立	学力・特技に秀でた生徒を獲得し、本校生徒の牽引者を育成する。	B	感染予防対策を講じながら、各説明会や学校訪問を入試アドバイザーの協力のもと行ったが、生徒獲得には至らなかった。
		指導者との連携の強化	対外試合や習い事教室等の場を利用して情報を得る。	A	大会・試合が中止の中、各指導者と連携をとりながら生徒情報を得た。
		入試制度の検討と充実	特待生制度の見直しを行い生徒獲得に繋がるように取り組む。	B	専願・一般入試の特待生特典を停止したが、生徒獲得には影響がなかった。
	小・中学生対象広報活動の強化	本校主催の大会等の充実	地域の諸活動の支援を行うと共に部活動の活性化を図る。	B	英語暗唱大会はオンラインでの発表の場を提供し、好評を得たが、尚絅杯ソフトテニス大会は、中止した。
		入試改革の達成	中学入試を中心に入試科目を検討し、本校の特色を打ち出す。	B	中学入試に英語を取り入れて3年目となり、本校の特色の一つとして今後も広報に力を入れる。
		小学校・英語塾等の訪問強化	本校の英語教育の成果や一貫教育の利点を広める。	B	学校説明会などを利用して一貫コースや英語教育の特色をPRした。

関係者評価

令和3年度 尚絅中学高等学校 学校評価

学校生活に関して「生徒」「保護者」にアンケートを実施しました。

○：よくあてはまる・ややあてはまる ●：あまりあてはまらない・全くあてはまらない

生徒による評価			生徒による評価の総括
1	尚絅に入学して良かった	○ 80% ● 12%	今年度も新型コロナウイルス感染症の感染状況に応じて、短縮授業や数日間の休校等の措置を講じながらの教育活動であった。今年度は体育祭・文化祭・修学旅行等の学校行事を、工夫しながらできるだけ実施の方向で取り組んだ。縮小した形ではあったが、学校行事は生徒達にとっては日常の授業にはない気づきや友人との絆を深めることに繋がり、改めて学校での教育活動の意義を考えさせられた。また、コロナ禍の中で様々な活動が制限され、充実した学校生活とは言えない時期もあったが、生徒たちは②の結果のように楽しく学校生活を送っている。しかし、依然として①の項目がアップするには至っていない。昨年度・今年度のアンケートにある生徒の具体的な声から、次年度より通学用リュックと紺色靴下の採用を行うこととした。また、オンライン体制については試行錯誤であるが、少しずつ整備をしているところである。アンケートの結果を踏まえ、改善が必要と思われる項目については真摯に受け止め、継続して改善に取り組みたいと考えている。
2	友人と仲良く楽しい学校生活を送っている	○ 96% ● 1%	
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	○ 85% ● 7%	
4	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 92% ● 2%	
5	部活動が盛んである	○ 90% ● 2%	
6	施設・設備が充実している	○ 98% ● 0%	
7	掃除など環境美化に取り組んでいる	○ 86% ● 2%	
8	先生や来校者への挨拶や礼儀作法の実践を心がけている	○ 91% ● 2%	
9	新型コロナウイルス感染症に対して適切な対応を行っている	○ 83% ● 12%	

保護者による評価			保護者による評価の総括
1	尚絅に入学させて良かったと思う	○ 90% ● 7%	保護者の評価については、③⑥の学力、進路指導に対する満足度が低い。昨年度の反省から、今年度は教職員の学力テストの導入、ICTを取り入れた研究授業や業者による授業アンケートの実施などに取り組んだが、大きな満足度向上には至っていない。今後も継続して教員の指導力向上に取り組んでいく。⑤については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止から部活動がかなり制限されたことも原因の一つであると考えている。多くの大会やイベントが中止や延期となり、課外活動の充実度が低下した。次年度はコロナ禍の中でも生徒の成長に繋がる教育活動を工夫して実施していきたい。また、⑨に関しては様々な保護者の考え方がある中、全ての保護者に理解していただくことの難しさを感じている。今年度は、やむを得ず登校できない生徒に対して授業のZoom配信を実施したが、様々な課題・問題点が浮き彫りになった。改善をしながら、コロナ禍の中、いかにして教育活動を継続していくか、全職員で情報を共有しながら考えていきたい。
2	友人と仲良く楽しい学校生活をすごしていると思う	○ 93% ● 6%	
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	○ 81% ● 13%	
4	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 89% ● 6%	
5	部活動が盛んである	○ 83% ● 7%	
6	進路指導が適切に行われている	○ 78% ● 12%	
7	施設・設備が充実している	○ 95% ● 1%	
8	掃除など環境美化に取り組んでいる	○ 85% ● 3%	
9	新型コロナウイルス感染症に対して適切な対応を行っている	○ 86% ● 10%	

学校評価委員（保護者の代表・同窓生の代表）に評価をお願いしました。

- 尚絅の良さは、多様性ではないかと感じる。色々な生徒がおり、多様性に応じて生徒を支援し、個々の進路に対してどの生徒も応援する学校であると思っている。様々な場面で活躍している生徒がいるが、個々の生徒の活躍があまり表に出ていないことを残念に思う。教職員が独自でアピールすることも大事であるが、生徒の生の姿や活躍を見ていただいた方が、尚絅の良さは伝わるのではないだろうか。それぞれで活躍している生徒がいるのに勿体ない。子どもたちをもっと表に出し、また生徒たちも表に出ることで内面も磨かれ、成長に繋がると思う。
- 同窓会からの支援については同窓会会費の課題もあるが、できるだけ現在の在校生への援助をしたいと考えている。コロナの影響で今までとは異なる部分もあるが、学校の方から必要なものがあれば同窓会へ打診してもらいたい。今までのやり方ではなく、時代に合わせて変えていけるものは変えていきたい。
- 卒業生などの活躍は、身近なロールモデルとして在校生にも分かりやすい。社会人になったときに自分たちがどのような人生を送るかが教育の成果である。生徒数増加へすぐに成果が現れなくても、礼法教育などのよいことは続けていくことで必ず成果に繋がると思う。
- 尚絅大学で取得できる資格については、女性にとっては大変魅力的である。資格があることでどのように将来活躍できるかなどを、具体的に伝えるとよいのではないかな。仕事をすることや社会で生きていくために何が必要かを高校時代にしっかり教えていただき、将来、社会で活躍できる自立した女性を育ててもらいたい。

■総合評価

① 特色ある教育の確立

今年度もコロナウィルス感染症により様々な制約を受けたが、昨年度の経験を基に工夫を凝らしながら実施できたことも多かった。ZOOM配信による学習支援やロイロノートを利用した取り組み、グローバル教育の一環としてオンライン留学など職員が知恵を出し合って取り組んだ結果が「学びを止めない」繋がりに結びついたと考えている。専門家を招いての対面での講演会や研修会の実施には相変わらず難しさがあったが、オンラインでの実施が一般的になり、本校でも授業に限らず進路指導部や環境教育で利用しながら、特色ある教育の確立を目指して、現在考えられると最大限のことを行うことができたと考えている。

② 教育の質向上

今年度は、生徒に学力をつける為に、まず、教員の教科指導力アップ。それに続くものとして授業改善の2つを中心に取り組んだ。その具体策として、①教員の能力テスト②業者による授業アンケートの実施を取り入れ客観的な情報分析の結果を踏まえ取り組むことにした。生徒の学力向上において、教科専門性の能力が教員に求められるのは当然の事であり「教育の質」に大きくかかわってくる。また、学力の問題だけでなく、日常の学校生活は生徒にとっては全てが学びの場になることを踏まえて、授業、部活動、委員会活動等あらゆる場面をとらえて人間力を高める教育を目指して社会に送り出したいと考えている。

③ 生徒支援の確立

奨学金制度や表彰制度の活用においては十分な支援に繋がる働きができたと考えている。また、課外活動においては制限された中での開催であったが、全国大会、九州大会出場などの結果を残すことができた。また、例年と比べて中途退学者が多く、本人だけでなく家庭的にも様々な問題を抱え、なお且つその問題も複雑化しつつあると感じている。カウンセラーのきめ細かいケアと環境保健部、教職員の連携により早めの対処ができています。しかし、次年度から県の時習館構想のSSWが終了となり、新たな取り組みも模索していかなければならない。育友会、花桜会との連携はできる場面が限られていたが、様々な機会をとらえて積極的な支援をいただいたと感謝している。

④ 地域貢献の充実

対外的なイベントや活動は中止となったが、ボランティア活動においてはフードバンクや子ども食堂の手伝いなど目に見えた活動を実施することができ、地域貢献とまではいかなかったが意識付けにはなったと感じている。アリーナを開放しての塾や部活動の対外試合などは感染状況を見ながら小規模ではあったが実施することができた。

⑤ 学習意欲あふれる生徒の確保

広報部や入試アドバイザー、部活動顧問を中心として募集活動を行ったが入学者獲得には至らなかった。今年度の反省点として、本校の特色や部活動、内部進学について、進路実績やその取り組み、個別対応の実態など本校の良さを客観的な資料を基に端的に、また、十分に説明する工夫が必要だった。それによる塾や中学校から「最近、尚絅の印象が薄くなった」との意見が聞かれた。コロナ禍もあり全職員での訪問を実施せずに、入試アドバイザーに学校、塾の訪問をお願いしていた為、職員の意識の薄さが反映されていると感じている。次年度は、市場リサーチの結果を踏まえ、広報部と全職員との連携を密にして、広報部の取り組みを全員で共有した上で実施する必要性があると認識している。

■令和4年度への課題・改善方法

① 外部評価委員、保護者からは学校に対する良い評価をいただいたが、その言葉に甘えることなく謙虚にこの一年間の教職員の力不足を振り返る必要があると痛感している。予測できない現代社会の中で、いかに自立した人間として世に送り出すかということを考えると、まず、学校はあらゆる場で教育の場になるということを改めて全職員で共有することの重要性を感じる。そのために学校教育で行うべきこととして、生徒会活動や学校行事、部活動などを通して人間教育を行わなければならない。その一つとして次年度は教師の指導の下ではなく、生徒会や部のキャプテン、委員長などリーダーを中心とした活動にするにはどのようにすべきかを考えた仕組みが必要と考えている。それには学校内だけではなく外部指導者の力を借りて、また、地域社会とつながりを持つことで生徒達に多くの経験を積ませたいと考えている。コロナ禍の中、どの程度のチャンスがあるか分からないが、あらゆる可能性を探りながら生徒を刺激していきたい。

② 本校の特色の一つである大学・短期大学部への内部進学も充実してきたが、やはり長年課題となっている進路指導や学力向上についての評価は低い。これこそが教育の質に関わる重要な課題であり、生徒・保護者が将来について安心して任せられる学校とならない大きな要因である。まず、自分の専門教科である「授業」で勝負できる教師にならない限りは満足度を上げることは難しいと考えている。そのためにも教員能力試験を利用した客観的な資料を基に研修を重ねながら教員自身の努力の度合いを測りたいと考えている。また、知識だけでなく日頃からの生徒への関わり方、進路指導スキル、教師としての資質について等総合的な判断を基に管理職や各部署での個別面談を重ねていきたい。